徳島県立鳥居龍蔵記念博物館研究報告
Bull. Tokushima Pref. Torii Ryuzo Memorial Mus.
No. 1：171-181, March 2013

【論　　説】

鳥居龍蔵の第 5 回台湾調査をめぐって

石尾和仁

はじめに―台湾調査の目的と意義―

日清戦争の結果，台湾を領有することになった日本政府は，台湾総督府を通して村落ごとに青年団を組織し，それに統治機構の末端を担わせる方式を採って，支配の実効力を高めようとしていた［山路2002･2009］。当時の台湾社会について，日本国内では，未開の蕃族が暮らす山地を抱えており，首狩り習俗を残す社会と認識されていたこともあって，台湾総督府から東京帝国大学理科大学に動物・植物・地質・人類の 4 分野の教官を台湾に派遣することが求められ，人類学分野には台湾山間部の「アボリジニス生蕃」調査の依頼があった時にも，すぐには人選がまとまらなかったようである［鳥居1953（全集12：1-74）］。

鳥居龍蔵が，台湾原住民族の調査を担当することになった理由を，「私は遼東半島の調査に引き続いて，なお東北方大陸の研究をしようと志していた時であった」けれども，「私を除いては他に行く人がないので，気の毒に思い，大胆にも決心した」と記しているように［鳥居1953（全集12:190）］，台湾原住民族の社会に入っていくことは，ある種の覚悟を要したのである。

鳥居龍蔵の台湾調査は，これを契機にして，1896（明治29）年から始まることとなった。鳥居は台湾調査について，自叙伝『ある老学徒の手記』や「人類学研究･台湾の原住民（一）序論」では，1900年までに 4 回訪台したと書き記している［鳥居1953（全集12：1-74），鳥居1910（全集 5 ：1-74）］。この間，台湾の代表的な遺跡である円山貝塚や台湾南東部に浮かぶ蘭嶼（紅頭嶼）をはじめ，ほぼ台湾全域を調査した。特に，1900年の第 4 回調査では，森丑之助らとともに，当時の日本領土で最高峰だった玉山（新高山）登頂にも成功している。また，日本の人類学者として初めて自らカメラを用いて，原住民族のすべての部族を調査したことも，スケッチが主流であった当時としては画期的なことであった[(1)]。

しかし，鳥居の訪台はこの 4 回だけではなかった。1910年末から翌春には第 5 回目の台湾調査を行っている。この第 5 回調査については，これまでにも，猪谷千香氏が第 5 回目の調査あった可能性を指摘し［猪谷2001］，末成道男氏も1910年末から翌春にかけてタイヤル族の調査を実施していたことを明記している［末成2001］。その後も，西田素康氏や柳本通彦氏が 5 回目の調査があった可能性を指摘されているし［西田2004，柳本2005］，笠原政治氏は，次のように鳥居の 5 回目の台湾調査について言及している［笠原2005：233］。

> 鳥居はこの四回の渡航が終わった後，一九一〇（明治四三）年から一九一一年にかけてもう一度だけ台湾を訪れた。そのおりに台湾博物学会で行った講演「台湾蕃人の人種調の方法」［一九一一］の筆記録が同学会の機関誌に掲載されている。

そして，近年宮岡真央子氏が『台湾日日新報』の記事から第 5 回調査の動向を確認された［宮岡2012］。このように諸先学の指摘や台湾博物学会の記録からも鳥居の 5 回目の訪台が確認できるのである。それでは，なぜ鳥居は第 5 回目の台湾調査について，その後報告書や論文という形で何も書き残さなかったのであろうか。小稿では，鳥居が，自らは詳細に述べていない第 5 回目の台湾調査の動向を確認するとともに，鳥居の台湾調査の意義を検討していくことを目的とする。

1　鳥居龍蔵の台湾調査と原住民族の分類

鳥居龍蔵は，台湾原住民を「マレー種族」あるいは「原マレー」と位置づけていたが，東アジア諸民族との比較によって，台湾原住民の台湾への来住の経路や時期について明らかにすることが人類学者の使命と考えていた[(2)]。その原住民調査のため，1900年までに 4 回の台湾調査を実施している。この 4 回分について，時期や行程については，松澤員子氏の整理がすでにあるが［松澤1993］，補足できる部分もあることから，ここで再度確認しておく。

①第 1 次調査（1896年8月～12月）

遼東半島にも同行した淡路岩屋のＨ氏を助手に伴い，宇品から出航（『ある老学徒の手記』では10月とあるが，8 月に台湾から投函した書簡が『東京人類学会雑誌』126号　1896　に掲載），基隆に上陸，台北に行ってまず始めに台湾総督府を訪問し樺山資紀総督に面会，その後，台北で円山貝塚の調査を行った。そして，花蓮に向かい，そこから卑南まで南下しつつ東海岸一帯でアミ族やブヌン族・ピウマ族などの民族調査を行った。再び北上して太魯閣ではタイヤル族を調査している。

帰途には，沖縄に立ち寄り，風俗習慣の調査をしている。花蓮で田代安定と面会したことが沖縄訪問の直接的な理由であると思われる[(3)]。

②第 2 次調査（1897年10月～1898年1月）

出発にあたって，東京地学協会長でもあった榎本武揚から派遣依頼状を受け取り，さらに台湾総督府では乃木希典総督に紹介状を認めてもらっている。新聞広告の助手公募に応じた徳島市出身の中島藤太郎をともなって，台湾南東に浮かぶ蘭嶼（紅頭嶼）でヤミ族の調査を行った。それに先だって台北では淡水河沿岸の石器時代遺跡や八芝蘭の石器時代遺跡，さらに円山貝塚を調査している。

③第 3 次調査（1898年10月～12月）

車城，恒春から牡丹社に入りパイワン族を調査した。さらに卑南山上の大南社を調査した後，知本渓でルカイ族を調査した。そこから台東に出て，緑島（火焼島）に渡っている。第 3 回調査では，パイワン族をはじめ台湾南部の諸民族を調査した。

④第 4 次調査（1900年 1 月～10月）

第 4 回調査では，森丑之助を助手にともない調査している。基隆から台北に入った鳥居は田代安定宅で泊まり，台湾総督府で打ち合わせた後，澎湖諸島に向かった。澎湖諸島では馬公に寄港し，その後台南県に入っている。高雄，鳳山，屏東，水底寮を経てリキリキ社でパイワン族を調査している。コンロンナウ社では祭日のために 5 日間逗留させられている。その後，ボガリ社で200以上の首が並んだ首棚を目の当たりにしている。

さらに北上して嘉義でツォウ族を調査し，阿里山，さらに玉山（新高山）の登頂を果たした。鳥居と森，嘉義弁務署主記の池畑要之進及び台湾原住民の 8 名を含めた11名からなる一行は困難の末に登頂に成功し，頂上に「我日本の人類学研究は新高山の山頂に及べり吾人は尚ほ一層研究の高からんことを期す」と記した標柱を立てたという［鳥居1902：25］。

なお，森によれば，鳥居が澎湖諸島を訪れたのは，この時が 2 回目であったという[(4)]。鳥居自身は何も記していないが，第 3 次調査に際して澎湖諸島を訪れていたのであろうか。

鳥居は，この 4 回の調査を通して，習俗，言語，伝承，風俗習慣から台湾原住民族を，タイヤル族・ツォウ（新高）族・ブヌン族・サウ族・ツァリセン族・パイワン族・ピウマ族・アミ族・ヤミ族の 9 部族に分類した[(5)]［鳥居1910］。

鳥居は，「ここに人類学上注意すべきは，現今台湾島の居住民は後に移来の中国人を除き他はインド

ネジアンのみの住居地であり彼等はいつ頃此処に移って来たかという問題である。そして更に考うべきことは台湾の前岸西南支那居住者苗・傜等との関係である」と記しているように［鳥居1953（全集12：195）］，台湾調査を通して中国西南部の雲南省や貴州省に関心を広げていったのである[(6)]。鳥居は，アミ族が語り伝えていた伝説から，日本民族との関係に興味をもち，さらに台湾を介在させて日本と中国西南部・インドシナ半島に関心を向けたのである。その中国西南部調査では，苗族の来歴を調べるために典籍の読解にも力を注いだことから，その後の文献史料をも加味していく研究スタイルの基礎が形作られていったのである。これが1905年に白鳥庫吉が東洋史学会を立ち上げた際に鳥居もそれに参画することになる前提ともなった。

また，台湾調査では，生蕃とよばれた山地の原住民族を詳細に調べ，原住民族の分類の基礎をつくったこと，円山貝塚や大嵙崁，烏山頭，さらに卑南の巨石文化の調査を通して，先史時代研究の先鞭をつけたことは，台湾における先史考古学・民族学研究にとって先駆的な役割を果たすことになったとも評価されている［金子1991，宋1993］。

2　第 5 回台湾調査の動向

これまで鳥居龍蔵の第 5 回台湾調査をめぐっては，限定的ながら論じられることがあったものの，『ある老学徒の手記』の記述にしたがって1896～1900年までになされた 4 回の調査に限定して論じられることも多かった[(7)]。

そこで，『台湾日日新報』の記事から鳥居の動向を検討された宮岡真央子氏の近業もふまえて第 5 回調査の行程を整理しておこう。

まずその出発にあたって，1910年10月20日に発行された『東京人類学会雑誌』295号には，「鳥居講師の生蕃取調嘱託」として，次のような記事が掲載されている。

> 理科大学講師鳥居龍蔵君は，今回台湾総督府より生蕃の人類学上の取調を嘱託せられたり。今や生蕃の討伐は総督府において着々実行さることとて，其の研究は此期を失せんか。或いは遂に其実情を失う慮なきにあらざるに，多年此の方面の研究に尽くされたる同君がこの事に当たるるに至りしは，誠に慶すべきことなり。何れ機を見て蕃地へも赴かるべければ，有益なる新資料を蒐集せらるるべき事と思わる。

写真 1　日露戦争紀年碑

すなわち，台湾総督府の依頼で調査に行くこと，しかし，「今や生蕃の討伐は総督府において着々実行」されているところであることから，原住民調査は今しかできないであろうという危機感が人類学教室内にはあったことがうかがえる。実は鳥居のこの時の調査が台湾総督府の依頼であったことは，楊南郡氏が当時の台湾での新聞記事から確認されていることでもある［猪谷2001：456］。

その第 5 回調査の行程については，安藤正楽に宛てた書簡から確認できるので紹介していこう。鳥居が書簡を送った安藤正楽は，旧稿でも紹介したように［石尾2010］，愛媛県宇摩郡小富士村（現在の四国中央市土居町）の出身で，明治法律学校を卒業後，郷里で県会議員などを務

めた政治家である。いわゆる被差別部落の分校問題や軍事関連予算の濫用を議会で取りあげるなど，当時の社会状況の中にあってはすぐれた人権感覚を備えていた人物である。[8] この安藤は，1907年に日露戦争から帰還した同郷の兵士に依頼されて「日露戦役紀念碑」の碑文を記したが，その一節に「忠君愛国の四字を滅す」という一文があったことから，大逆事件のあった1910年に検挙されてしまう。その後，幸徳秋水が処刑された日に釈放されたが，地元に建てられていた碑文の文面は削られてしまったのである（写真１）。

写真２-１　12月25日付書簡

安藤と鳥居の出会いは，安藤が県会議員を辞めた後，東京帝国大学人類学教室で人類学を学んだことにある。1908年頃のことであった。そこで鳥居と出会い，1910年に刊行された鳥居の『南満洲調査報告』（東京帝国大学）では一部を分担執筆をしたほか，図版関係は安藤が担当した。また，帰郷した後は，愛媛県内で初の本格的な発掘調査となる宇摩郡平坂山での調査を実施するなど，愛媛考古学界の草分けとなった人物でもある［冨田2007a・2007b］。

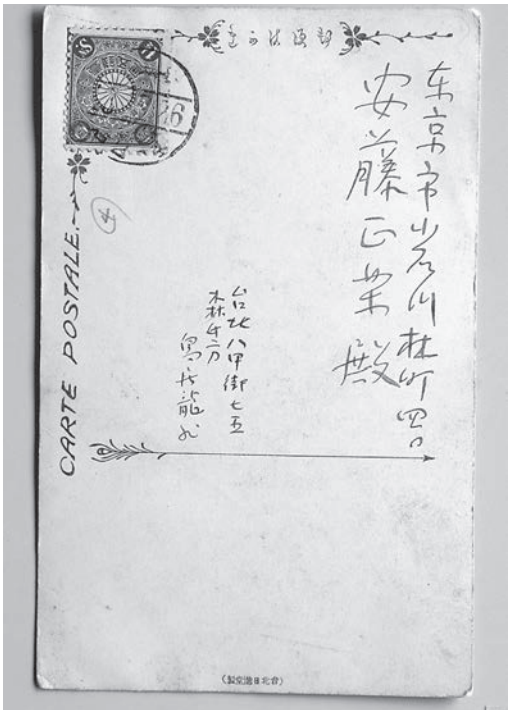

写真２-２　12月25日付書簡表

安藤正楽の紹介が少し長くなってしまったが，書簡の内容を検討していこう。まず，1910年12月25日付の安藤正楽宛の葉書（写真２－１）には，基隆に到着し，これから台北に向かうことなどが記されている。そして，29日頃から大嵙崁を経て，ガオガン蕃地からボンボン渓（梵梵：宜蘭県大同郷）に向かう予定であると記している。また，12月29日付の安藤宛書簡でもカオガン蕃地調査について記しており，さらに，1911年1月14日付の宜蘭消印のある手紙（写真３）には，「拝啓　陳者小生儀当将Taiyal族の調査中です」とある。

そして，１月25日台北消印の葉書には，タイヤル族の調査を終えたこと，来月から南部のツァリセン族及びパイワン族の調査を行い，再び蘭嶼（紅頭嶼）に赴く予定であると記している（写真４）。２月１日付の書簡でも新竹・苗栗方面のタイヤル族を調査し，３月には紅頭嶼や緑島（火焼島）に行く

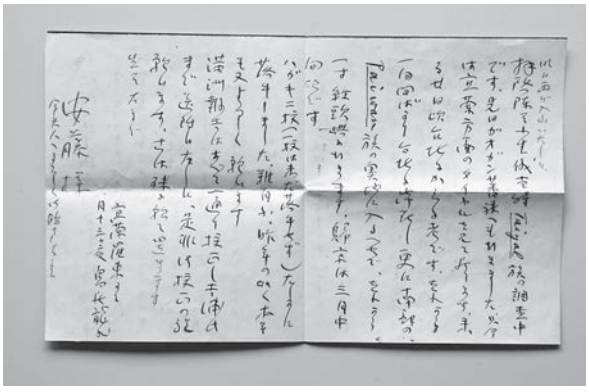

写真３　1月14日付書簡

写真4　1月25日付書簡

予定であると記している（写真 5 ）。

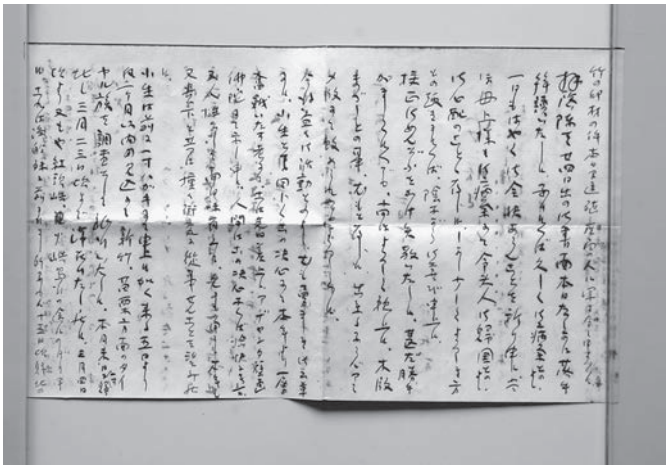

写真 5　2 月 1 日付書簡

安藤正楽宛ての書簡に書き記した内容は，東京人類学会宛に書き送ったものにも記されており，1911年 2 月20日発行の『東京人類学会雑誌』299号には，「鳥居講師よりの通信」と題して，次のような坪井正五郎宛の書簡（ 1 月24日付）が掲載されている。

> 宜蘭より（渓頭蕃，南澳蕃を調査し）ボンボン渓に沿ふてボンボン山にのぼり，又もやガオガン蕃地に入り大嵙崁を横断し，昨夜無事台北にかへり申候，この行色色の調査を為し，又山上諸処にて石器時代遺跡を発見いたし候，遺物中に土器ありて，幾何学的紋様など附し居候，台北に本月中は滞在の覚悟にて，来月早々当地を出発，南部に赴き一ヶ月を費やす筈にて，帰北せば又もや先日申上候如く，紅頭嶼行の途にのぼるべく候先ずは右まで。蕃人風俗等の調査はこゝ四五年の間に候，この時期を経過せば全く日本化し申候

さらに，続けて同三十日発の通信も同号に掲載されており，それには次のように書かれている。

> 南部行を変更し，来月五日当地出発，新竹，苗栗のタイヤルを調査する考にて，本月々末帰北，三月はじめ紅頭嶼火焼島の行に相のぼり申し候，台北圓山貝塚其他の遺跡は手をつけ居，採集品も数多有之候，こゝにて面白き事実を発見いたし候。

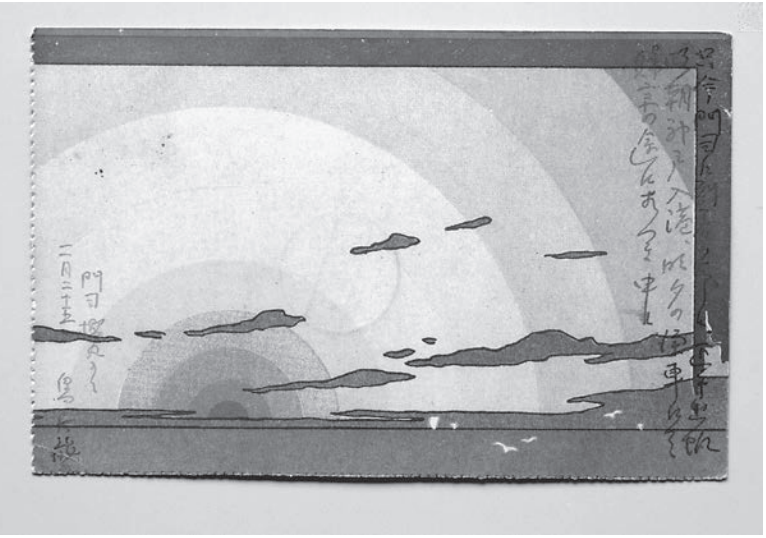

写真 6　2 月25日付書簡

ここにあるように，1910年12月に台湾入りし，翌春まで第 5 回台湾調査を実施していたのであり，この時には，書簡の通り，宜蘭からボンボン渓を経て台北に至り，この間タイヤル族の調査を行い，その後西海岸の新竹から苗栗を訪れている。新竹や苗栗でもタイヤル族の調査を実施した。この間，2 月 4 日には台北の高等女学校で開催された台湾博物学会で講演もしている［鳥居1911］。しかし，「三月はじめ紅頭嶼火焼島の行に相のぼり申し候」と書き送っていたが，鳥居は 2 月下旬に急遽帰国している。2 月25日の山口県下関東の消印のある安藤正楽宛て書簡には門司に到着したことが記されていることからも，この時までに帰国したことが確かめられるが（写真 6 ），その理由について 2 月23日付『台湾日日新報』が「人類学者帰京」の見出しで，「人類学者鳥居龍蔵氏。擬在紅頭嶼研究番人。茲因接母病之電。急変更旅程。由新竹方面帰北。」という記事を掲載している。すなわち，母の病気の知らせで予定を変更して急遽帰国したことがわかるのである［宮岡2012］。

安藤正楽宛の書簡及び宮岡真央子氏が紹介された『台湾日日新報』の記事，ならびに東京大学人類

1910年12月22日	台湾に向かう途中，長崎に寄港した件	石田収蔵宛書簡
25日	基隆到着，台北に向かう	安藤正楽宛書簡
	台北に到着し，森丑之助宅に身を寄せる	台湾日日新報
29日	この日頃からボンボン渓に向かう予定	安藤正楽宛書簡
30日	森丑之助とともに「ガオガン蕃社」に向かう	台湾日日新報
1911年 1 月　9日	宜蘭から台北に戻る	台湾日日新報
14日	宜蘭消印の書簡でタイヤル族調査中と伝える	安藤正楽宛書簡
24日	ボンボン渓のタイヤル族を調査し，昨夜台北に戻る	坪井正五郎宛書簡
25日	台北からタイヤル族調査を終えたこと	安藤正楽宛書簡
2 月　1日	新竹・苗栗のタイヤル族を調査する件	安藤正楽宛書簡
4日	台湾博物学会で講演	鳥居1911
8日	森，大浦元三郎（蕃務本署嘱託）とともに新竹方面に赴く	台湾日日新報
11日	馬那邦山登頂を果たす	台湾日日新報
22日	母の病気のため帰国	台湾日日新報
25日	門司に到着している件	安藤正楽宛書簡

備考 1 ：台湾日日新報は，宮岡真央子2012「『台湾日日新報』にみる鳥居龍蔵の第 5 回台湾調査　附　記事一覧，談話録，講演録」日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究Ｂ（海外）『台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究―学術，制度，当事者の相互作用―』（中間報告書）による

備考 2 ：石田収蔵宛書簡は，守屋幸一編『明治・大正期の人類学。考古学者伝　板橋区立郷土資料館所蔵石田収蔵氏旧蔵はがき資料集』（板橋区立郷土資料館）による

備考 3 ：坪井正五郎宛書簡は『東京人類学会雑誌』299号による

学教室の坪井正五郎や石田収蔵に宛てた書簡から確認できる行程を整理すれば上表のようになる。

このように，少なくとも『ある老学徒の手記』などで記された 4 回の調査以外にも，1910年末から翌年 2 月下旬にかけて台湾を訪れていたのであり，この時の調査を通して「面白き事実を発見」しているのである。

それでは，どうして鳥居はこの「面白き事実を発見」した第 5 回調査のことについて，報告書や論文にまとめることをしなかったのであろうか。直接的にそのことを示す材料はないが，この年から始まった台湾総督府の理蕃政策が少なからず影響したのではないかと考えられる。次節で総督府による理蕃政策の経緯を見ていこう。

3　台湾総督府による理蕃政策の展開と鳥居龍蔵

鳥居龍蔵は，第 5 回目の台湾調査を実施しながら，『ある老学徒の手記』をはじめとして，論文や報告書にはそのことを記さなかった。1200件をはるかに越える論稿を執筆していながら，「面白き事実を発見」したこの時の調査に関しては何も記さなかったことになる。

この第 5 回台湾調査の直後から，朝鮮総督府の依頼で朝鮮半島調査にたずさわることになったからであろうか。決してそうではなかろう。

先に引用した坪井宛の書簡に「蕃人風俗等の調査はここ四五年の間に候，この時期を経過せば全く日本化し申候」と記しているように，原住民族の生活文化の変貌が著しいことも大きな要因であることも間違いではなかろう。本節では，鳥居が台湾調査をしていた頃の統治支配のあり方から，鳥居の意識を探ってみたい。

日清戦争後の1895年に台湾総督府が設置されたものの，すぐに台湾での統治支配が軌道に乗ったわけではなく，次のような歴史的段階が想定されている［黄1981］。

①懐柔期（1895～1902）
漢族の対処に負われる時期。
②鎮圧期（1903～1909）
原住民族に対する圧政が始まった時期。
③五箇年計画期（1910～1915）
「蕃務本署」を設置し，原住民族の弾圧が行われた時期。
④同化期（1916～1930）
原住民族の教化・授産，威圧と山地開発が進展した時期。
⑤新理蕃政策期（1931～1945）
原住民族の集団移住など，生活習慣の改変が進んだ時期。

樺山資紀，桂太郎，乃木希典，児玉源太郎の歴代総督に続いて，第 5 代台湾総督に就いたのが佐久間左馬太である。1906年 4 月11日のことであった。その後，1915（大正 4 ）年 5 月 1 日に安東貞美が総督に就任するまでの間，佐久間がその任にあった。

その佐久間時代の1910年春に，武力で原住民族を従属化させる「理蕃五カ年計画」がスタートした。前述した歴史的段階としては第 3 期にあたる。それまで総督府は，平野部の鎮圧に追われて，山間部の原住民族の統治にようやく手を付けることが出来るようになったのが佐久間総督時代であったともいわれているが［黄1981，岡本2008］，いずれにせよ，鳥居は，「理蕃五カ年計画」が始まったばかりの1910年暮れに台湾を訪れていた。

この時の調査が台湾総督府の依頼であったことは先述したが，佐久間総督が理蕃計画の推進のために，鳥居の原住民族に対する知識を必要としたためかも知れない。特にこの時の鳥居の調査がタイヤル族に集中していることは注意を要する。なぜなら，この後佐久間総督は頑強な抵抗を試みていたタイヤル族をタロコ（太魯閣）地域での「征討」に着手したからである。(9)

佐久間総督が行った太魯閣弾圧については，「自ら二個連帯を率いて標高三四〇〇メートルの山側からタロコに向かった。海側すなわち花蓮港から作戦を展開する警察隊とあわせて出動兵力は三千百八名に達し，人夫を含めて一万の軍勢が三か月にわたってタロコを包囲し，大峡谷を血に染める殺戮戦を繰り広げた」と指摘されているように［柳本2005：164］，相当な厳しさで進められたと考えられる。

このような徹底した理蕃政策のために大きく変貌していく原住民の実相を目の当たりにして，鳥居はもはや台湾に対する研究上の必要性を認めなかったのかも知れない。あるいは，徹底した弾圧を実施した佐久間総督の依頼で訪台した第 5 回台湾調査を自らの経歴から抹消したかったとも考えられる。いずれにせよ，後年になっても正式の調査報告に関わる文章は執筆せず，また，『ある老学徒の手記』でもこの訪台を記さなかったのである。

すなわち，鳥居にとって，原住民の生活様式が大きく変貌することになった佐久間総督による「理蕃五箇年計画」に関与したことが，第 5 回調査の内容を執筆しなかった理由ではないかと推測されるのである。

4　森丑之助との関わり

さて，鳥居龍蔵の台湾調査に深い関わりをもった人物に森丑之助がいる。1898年の第 3 回調査，1900年の第 4 回台湾調査に同行した森丑之助は，1877年生まれの京都出身者で，日本が台湾を領有した直後の1895年 9 月に通訳として台湾に渡り，以後，約30年間を台湾で過ごした人物である。そして，原住民調査に邁進し，言語に精通していくなかで，『ぱいわん蕃語集』（1909年），『阿眉蕃語集』（1909年），『ぶぬん蕃語集』（1910年）などを刊行した。さらに，『台湾蕃族図譜』（第一巻･第二巻，総督府臨時台湾旧慣調査会　1915）や『台湾蕃族志』（総督府臨時台湾旧慣調査会　1917）などのすぐれた民族誌も刊行している。また，鳥居の第 4 回調査に同行したときの経験を「生蕃行脚」としてまとめている［森1924］。この森丑之助については，すでに楊南郡氏や柳本通彦のすぐれた評伝があり［楊2005，柳本2005］，笠原政治氏や宮岡真央子氏の先行研究もあることから［笠原2003・2005，宮岡1997］，ここではその成果に依拠しながら，鳥居との関係について整理していこう。

まず，森丑之助が鳥居の第 4 回調査に同行した思いから紹介しよう。

> 第四回の際は私が進んで鳥居さんの忠実なる助手となり，地理の嚮導から土語蕃語の通訳，調査補助までやることゝなった。これは一には自分として実地学問の指導を受ける為であり，次にはこの犠牲的奉仕に依って此探検に大なる収穫を齎らし，聊かなりとも学術進歩の為に貢献したいとの希望と，実は出来得る限り鳥居さんの仕事の完成に助力を捧げたいとの念慮から出たものである。(10)

森は鳥居の調査を手伝いながら，自らも「実地学問の指導を受ける為」であったという。そして，この調査を契機に森は東京人類学会に入会することになる。通訳として台湾に渡った森が，その後すぐれた民族誌を刊行することになる契機がここにあったのであり，1913（大正 2 ）年に帰国した際には，東京人類学会で 3 回にわたって例会報告をしていることが確認できるのである(11)。そして何より，森が同行した第 4 回台湾調査で特筆すべきことは，前述したように玉山（新高山）の登頂と中央山脈の横断であろう。

台湾原住民族研究で大きな足跡を残した森丑之助ではあったが，自筆原稿の多くが公表前に関東大震災で焼失したと言われている。そうであれば，その学問的成果の全てを知ることが出来ないのはきわめて残念なことである。

なお，鳥居は，第 5 回調査でも台北市にあった森の住居を根拠にしていた。先に紹介した12月26日消印の安藤正楽宛ての葉書（写真 2 － 2 ）には「台北市八甲街七五　森氏方　鳥居龍蔵」とあるほか，12月28日付の安藤正楽宛て鳥居きみ子の葉書にも龍蔵が森氏方にいると記している（写真 7 ）。

その他，1926（大正15）年には，「数日前，台湾学者として頗る熱心な森丑之助氏から，次に示す写真のような最も珍しい遺物が発見されたのと，面白くかつ有益な報道があった」として，森丑之助からの石造物に関する情報を紹介している［鳥居1926（全集11：399）］。このように，鳥居は森丑之助を「台湾学者として頗る熱心」であると評価し，ともに玉山（新高山）に登頂して四半世紀が経過しているにもかかわらず，互いに連絡を取り合う関係にあったこと

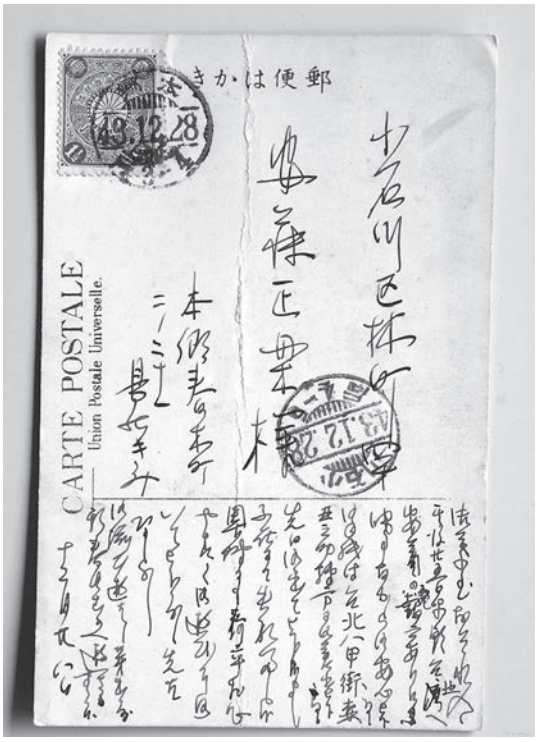

写真 7　正楽宛てきみ子書簡

がわかる[12]。なお，徳島県立鳥居龍蔵記念博物館には，1919（大正 8 ）年の鳥居龍蔵宛て森丑之助の年賀状や「森」の印が押された地図など，森丑之助に関する資料も所蔵されている［石尾・下田2012］。

おわりに

鳥居龍蔵は，1910年末から翌春に実施した第 5 回台湾調査について，『ある老学徒の手記』はもちろん，調査成果報告書や論文を執筆することはなかった。その原因の一端に，台湾総督府の佐久間総督による激烈な「理蕃五カ年計画」があると想像される。

鳥居は，初期の台湾調査で残したようなポートレート的な人物写真は，次第に撮影しなくなり，風俗・習慣・遺跡・遺物などの写真が多くなる。これ自体が，鳥居の問題関心の推移を示しており，当時の人類学が内包していた「帝国主義的視線」から次第に乖離していったことを示していると見てよいであろう。そのような鳥居にとって，佐久間総督による強引な「理蕃五カ年計画」は許容できないものであり，その計画がスタートする際の招聘に応えたことを悔いていたのだとも考えられるのである。

しかし，1900年までに行った鳥居の調査記録は，1910年から始まった「理蕃五カ年計画」で急速な変貌を遂げていく直前の原住民の社会生活・風俗を知る貴重な手がかりとなっており，きわめて高い学術的意義をもつものであると評価されてよいであろう。

註

(1) 鳥居龍蔵は，『ある老学徒の手記』のなかで，「大学で写真機を買ってもらい，速成でこれを習学し，不完全ながら写真機を携え台湾へ行くこととなった。斯学に自ら写真を応用したのは私がはじめてである。これまでは写真の必要な時は，人類学のみならず，他学科においても，等しく写真屋を呼んで撮影せしめたものである」と回顧している。この一文の最後にもあるように，人類学調査にカメラが用いられていなかったわけではなく，自ら撮影したのが初めてという点に留意しておかなければならない。例えば，坪井正五郎は1887（明治20）年の伊豆諸島調査で「同伴したる写真技手をして人類学上必要と認めたるものを撮影せしめたり」と回想している（「日本人類学の始祖　故坪井正五郎博士の自叙伝二」『ドルメン』2 巻 7 号 1933：pp8-10）。また，鳥居自身も，台湾調査に先立って訪れた遼東半島調査で，「（鳳凰城で）漢人，満人，回々人の写真を撮りたり。（略）一人の支那人馬を曳ける所の写真を撮りたり。尚ほ写真は多く手に入る見込有之候」と坪井宛に書簡を送っている（「東京人類学会特派遼東半島探検者鳥居龍蔵氏の書状」『東京人類学会雑誌』117号　1895：pp118-119）。この書簡に「写真は多く手に入る見込」とあるように，まだ鳥居自身の手許にはなく，現地の写真屋などが撮影したものであろうと考えられる。すなわち，鳥居の台湾調査以前から，日本人研究者の間でも写真技師に撮影させることが行われていたのである。したがって，「台湾調査は，写真機をはじめて使用したという意味でも重要である」（飯沢1992）という評価がよくなされているが，台湾調査以前のカメラ使用状況については十分な検討が必要であろう。

(2) 松澤員子「鳥居龍蔵の台湾調査」『民族学の先覚者　鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館 1993：pp50-54。松澤氏は，この論稿のなかで，「鳥居の実証的総合的人類学研究は，その後の台湾原住民族の研究に大きなインパクトを与えたであろうことはその後の台湾研究の成果に明らかである。鳥居の調査に続いて，台湾総督府は原住民各種族の慣習法の調査事業を進めたが，その調査のモデルになったのが鳥居の台湾調査であったようである」と指摘し，後の台湾研究の基本的なスタイルが鳥居の調査でできあがったと評価されている。

(3) 植物学者であった田代安定は，訪台前に八重山調査を経験しており，当該地域の開発に強い思いを抱いていた。1895年に台湾総督府殖産局に赴任していた田代は，鳥居と出会い，その思いを伝えたものと考えられる。

(4) 丙牛生（森丑之助）「生蕃行脚（1―5）」
後に楊南郡（笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子訳）『幻の人類学者森丑之助　台湾原住民 の研究に捧げた生涯』（風響社　2005）に再録：pp171-228

(5) なお，この鳥居の分類とは若干異なるが，台湾総督府も原住民族を 9 部族とした。現在は，1980年代の原住民運動を受けて，他民族のグループとされていたものや漢民族との融合が進んでいた民族も独自性が高いとして，台湾行政院原住民族委員会によって14民族が原住民族に認定されている。

(6) 中国西南部への関心の広がりについては，本誌掲載の吉開将人論文に詳しい。また，当時西欧の学会で主流となっていた漢族西来説に鳥居も大きな影響を受けていたことも指摘されている。

(7) 国分直一「鳥居龍蔵博士と平埔族」『乾板に刻まれた世界―鳥居龍蔵の見たアジア―』東京大学総合研究資料館　1991　pp21-23，前掲注2）松澤論文，野林厚志「鳥居龍蔵の台湾・西南中国調査」『史窓』34号　徳島地方史研究会　2004：pp51-62，同「歴史をこえた博物館資源の往還―鳥居龍蔵の台湾・西南中国調査とその資料―」北京日本学研究中心編『21世紀東北並日本研究論文集』学苑出版社　2009：pp47-53，などでは 4 回の調査としている。

(8) 安藤正楽については，山上次郎『非戦論者安藤正楽の生涯』（古川書房　1978）に詳しい。その他，安藤正楽についてふれたものに，水本正人「安藤正楽」『人権文化の礎』解放新聞社徳島支局　2005：pp18-23，明治大学史資料センター編『大学史紀要11号　安藤正楽研究』明治大学史資料センター　2007，などがある。

(9) 原英子氏は，タロコ族の間で佐久間総督の死に関わる伝説が語り継がれてきていることを紹介している（「佐久間左馬太台湾総督に関するタロコ族の記憶と「歴史」の構築」『台湾原住民研究』10号　2006）。

(10) 前掲注（4）丙牛生（森丑之助）論文

(11) 森丑之助の東京人類学会での報告は次の3回である。

1913（大正 2 ）年12月13日　第289例会
「台湾生蕃に就て」

1914（大正 3 ）年 1 月17日　第290例会
「台湾生蕃の山中生活」

1914（大正 3 ）年 5 月 9 日　第294例会
「台湾に於ける各蕃族の埋葬法に就て」

(12) 鳥居龍蔵は，第5回調査の最中である1911年 2 月 4 日に台湾博物学会で行った講演のなかで森丑之助の業績について言及した。笠原政治氏は，「もうその頃になると，かつての 師と弟子という関係を越えて，鳥居は森を独り立ちした研究者と見なし始めていたのかもしれない。森は生涯にわたって鳥居を尊敬し続けた。失踪の直前まで台湾の遺物発見に関 する情報を送っていたことが鳥居の論文にも記されている」と，鳥居と森の関係に言及している［笠原2005：233］。

参考文献

飯沢耕太郎　1992 「人類学者のカメラ・アイ」『日本写真史を歩く』新潮社：pp91-102
猪谷千香　2001 「前人未踏のフィールドワーク　鳥居龍蔵」『日本人の足跡―世紀を超えた「絆」を求めて―』産経新聞ニュースサービス：pp405-460
石尾和仁　2010 「鳥居龍蔵の朝鮮半島調査実施時期をめぐって」『考古学研究』57巻 3 号　考古学研究会　pp101-110
石尾和仁・下田順一　2012 『鳥居龍蔵の見た台湾』徳島県立鳥居龍蔵記念博物館
岡本真希子　2008 『植民地官僚の政治史　朝鮮・台湾総督府と帝国日本』三元社
笠原政治　2003 「佐藤春夫が描いた森丑之助」『佐藤春夫宛森丑之助書簡』新宮市立佐藤春夫記念館：pp23-32
〃　2005 「師・友人・訪問者たち」楊南郡『幻の人類学者森丑之助　台湾原住民の研究に捧げた生涯』（笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子訳）風響社
金子えりか　1991 「鳥居龍蔵博士と台湾の考古学」東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編『乾板に刻まれた世界―鳥居龍蔵の見たアジア―』東京大学総合研究資料館
黄昭堂　1981 『台湾総督府』教育社
佐藤春夫　1925「霧社」『改造』7 巻 3 号，後に同氏著『定本　佐藤春夫全集　第 5 巻』（臨川書店 1998）に所収：pp119-138
末成道男　2001 「鳥居龍蔵の研究」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究概覧　日本からの視点』風響社：pp23-27
宋文薫　1993 「鳥居龍蔵と台湾」『徳島の生んだ先覚者　鳥居龍蔵の見たアジア』徳島県立博物館
冨田尚夫　2007a 「安藤正楽と考古学・人類学」明治大学史資料センター編『大学史紀要11号　安藤正楽研究』明治大学史資料センター　pp235-255
〃　2007b 「愛媛県内初の発掘調査―安藤正楽と平坂山の発掘調査―」『愛媛考古学』18号　愛媛考古学協会　pp31-60
鳥居龍蔵　1902 「新高登山日記」小田切通敏・吉田頼吉編『日本地理精説』弘文館　pp1-28
〃　1910 「人類学研究・台湾の原住民（一）序論」『東京帝国大学理科大学紀要』28冊 6 編，後に同氏著『鳥居龍蔵全集　第五巻』（朝日新聞社　1976）所収
〃　1911 「台湾蕃人の人種調の方法」『台湾教育会雑誌』108号　pp222-231, 同109号　pp322-334
〃　1926 「台湾の古代石造遺物に就て」『民族』1 巻 3 号　：pp123-128，後に同氏著『鳥居龍蔵全集　第十一巻』（朝日新聞社　1976）所収
〃　1953 『ある老学徒の手記』朝日新聞社，後に同氏著『鳥居龍蔵全集　第十二巻』（朝日新聞社　1976）に所収
西田素康　2004 「新出の鳥居龍蔵関係資料」『史窓』34号　徳島地方史研究会：pp37-50
松澤員子　1993 「鳥居龍蔵の台湾調査」『民族学の先覚者　鳥居龍蔵の見たアジア』国立民族学博物館
宮岡真央子　1997 「野人の文化人類学―森丑之助の生涯と研究―」『南方文化』24号　天理南方文化研究会
〃　2012 「『台湾日日新報』にみる鳥居龍蔵の第 5 回台湾調査」『台湾原住民族の民族分類と再編に関する人類学的研究―学術，制度，当事者の相互作用―　中間報告書』（科研費報告書）
柳本通彦　2005 『明治の冒険科学者たち　新天地・台湾にかけた夢』新潮社
楊南郡　2005 『幻の人類学者森丑之助　台湾原住民の研究に捧げた生涯』（笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子訳）風響社
山路勝彦　2002 『台湾の植民地統治：〈無主の野蛮人〉という言説の展開』日本図書センター
〃　2009 「絵葉書の民俗誌，あるいは植民地の表情」『台湾原住民研究』13号　日本順益台湾原住民研究会　pp76-93

付記

安藤正楽宛て書簡の調査にあたっては，愛媛県四国中央市の暁雨館学芸員の近藤弘樹氏のお世話になりました。また，所蔵者の安藤亮一氏・山上茂次郎氏には掲載許可をいただきました。お礼申し上げます。